



1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『滋澤龍彦論コレクション』全5巻。5月26日に小樽文学館で講演の予定。

私がはじめて札幌を訪れたのは、もう半世紀近く前のことである。1972年、この地で冬季オリンピックのあった年の初夏で、当時29歳だった。学生時代からよく旅をしていて、すでに国内の大きな町はだいたい知っていたのだが、駅に降り立って歩きだしたとき、ほかの大都市とはまったく違う感じがしたことを憶えている。

空気がひんやりして爽やかだった。当世風のビルが並んでいるのは他の都市とかわらないが、道路が広くて空も広く青く深く、並木の緑が心地よい。大通公園に出ると鳥のさえずりも聞こえた。あちこちのベンチで人々がなにか食べている。トウキビの屋台からいい匂いがするので、1本もとめてその場でかじると、香ばしくて歯ごたえもよかった。樹木がさわさわと鳴る。ライラックの優しい香が漂っていた。

札幌

3つの庭園を歩く

巖谷 國士 Iwaya Kunio

視覚からの印象だけでなく、聴覚も嗅覚も味覚も触覚もいっしょになって、快い感覚をよびおこすような北の都市空間は、ヨーロッパやカナダあたりではよく出会うにしても、国内にはめずらしい。その後も10回以上は訪れていると思うが、そのたびに、講演などの仕事があっても最低2泊はして、市内のあちこちを歩きまわったものである。

最初のときには出迎えてくれた在住の若い友人がいて、私の第一印象に應えるかのように、樹木の多いところへ案内してくれた。円山公園ではハルニレやエゾアカマツに出会い、「アカシアの雨」にも打たれた。ホテルが中島公園に近かったので、園内を散策して北の植物になじんだ。エゾヤナギやヨーロッパクロマツやナナカマドなど。豊平館では縦長の窓から見える緑のグラデーションが新鮮だった。

そんなわけだから、札幌は私にとって、まず公園や緑地の多い町、植物の豊かな町だったことになる。それから何度やってきても、雪の白に覆われる季節は別として、たいていはどこかの公園や庭園を散歩した。

いうまでもなく札幌は国内を代表する大都市のひとつで、人口200万に近く、歴史的にも文化的にも社会的にもさまざまな特徴をもっている。魅力のある施設、博物館や美術館、大学や研究機関が多く、各種イベントにも事欠かない。また独特の食味についても語りたいところだが、今回はとくに、札幌にしかありえないような3つの公園をテーマにして、旅人からのオマージュを捧げることにしよう。

町の中心にある植物園

札幌を訪れたとき、時間さえあれば足を向ける場所のひとつに、北海道大学植物園がある。町のほぼ中心といってもよい場所に、こんな広い植物の世界がひろがっている大都市は稀だろう。大学の研究施設でありながら立地がよく、市民生活の延長としてだれもが散策できるような、さりげない園内のプランが素晴らしい。

初夏の午後、駅からぶらぶら歩いて赤煉瓦の道庁旧庁舎の敷地（ここにも小庭園がある）を通り、緑濃いアカナラの並木道を抜けると正門に着く。入ってすぐ右の管理棟の2階を占める北方民族資料も、じっくり見るべきところだ。この北の島と周辺各地に住んで自然と共生していた森の民は、土地に自生する植物とも深くかかわっていた。

その先にある古い西洋館は初代園長・宮部金吾の記念館だが、近くに咲いているライラックが美しい。現・北星学園の創始者スミス夫人がニューイングランドから移植した札幌最古とされるライラックで、房が大きく、色は独特の淡い紫。甘く爽やかな香がする。

湿生園になっている池を渡った奥にそのライラックの並木もあるが、いまはハルニレの林に行く。北の大地と先住民族を象徴する植物のひとつで、巨木の肌の皺や溝や不思議な凹凸から、神話・伝説を物語る古老のイメージが思いうかんでくる。

エゾマツをはじめとするさまざまな松、エゾヤマザクラをはじめとするさまざまな桜の大木もいい。樹木の香気と精気が全身を包んでくる。森にしかありえない感覚。遠い昔に人間の属していた、だが永遠に失ってしまった楽園のような自然界の記憶がふと蘇り、そこはかたないノスタルジアをよびおこす。喜びと切なさのまじる感覚である。

西奥に北方民族植物標本園、草本分科園とバラ園、南にロックガーデンや高山植物園、中央に博物館（世界唯一のエゾオオカミの剥製がいる！）と重要文化財群などがあって、どこも魅力的だが、今回は身近な植物の佇まいに惹かれた。ひとつは草地に一本だけ立っているシャクナゲ。驚くほど大きな木が真っ白な花に覆

われていて、地元のアマチュア写真家らしい若い女性が、ミニスカートの軽装で大きなカメラを掲げ、まわりを行ったり来たり、四方八方からダイナミックに撮影している有様に、なんとなく札幌の初夏を感じた。

もうひとつは水辺のズミの木である。大枝を池の上にのばし、真っ白な花に覆われた小枝をひろげているズミの姿には、なにか妖精界の出来事のような、自然の生命の一刻の所作といった風情があった。

1877年にクラーク博士の進言でつくられたこの施設は、国内では東京の小石川について古い植物園だ。樹齢数百年の古木もあって、開設以前から森だったことがわかるし、いまも森であろうとしている。よく見る「都会のなかのオアシス」といった紋切型ではすまないような、野生の緑のゾーンを中心部にとどめている都市、それが札幌だということだろう。

森のなかの野外美術館

もうひとつ、中心部から遠い南区には、札幌芸術の森という植物の世界がある。既存の森をふくむ40ヘクタールもの敷地に、その名を冠したモダン建築の美術館をはじめ、工芸館、木工やガラス・陶芸などの工房、窯場、絵画や版画のアトリエ、アートホールや野外ステージ、さらに有島武郎旧邸（移築復元）などの点在する総合施設で、どこも緑にかこまれているが、いま歩きたいのは斜面にひろがる野外美術館だ。

札幌芸術の森美術館ではこれまで二度ばかり大きな展覧会（「澁澤龍彦 幻想美術館」展と「森と芸術」展）を監修したことがあり、講演もしているので、私にはなじみの場所だけれど、とくに2011年秋、大震災の半年後に開催した「森と芸術」展では、館内だけでなく野外の常設展示も視野に入れて、展覧会にとりこもう

北海道大学植物園の池の上に咲くズミ（梅）
バラ科リンゴ属の1種で、酸っぱい実がなることから酸実とも書く。ミヤマカイドウ、コナシなどとも呼ばれる。撮影：筆者



としたものだった。

野外美術館なら国内各地にあるが、森そのものを展示場にしているところは多くない。当然ほとんどが彫刻で、それも既存の有名作品というより、大半はこの森のために制作された作品である。ということは、それぞれの作品もまた森の一部なのである。

たとえばイスラエルの彫刻家ダニ・カラヴァンによる「隠された庭への道」という複合的な大作がある。これは全長300メートル、樹木にかこまれた小川に沿って、合計7つの真っ白な造形物を配している。門、ドーム、日時計、一直線に並ぶ7つの泉、円錐ピラミッド、蛇行する急流、第二の門、そして最奥には、緑の繁みに「隠された」円形の「庭」があり、まわりに八方位を指すベンチが置かれている。

数や寸法は7を基本にしている、これは旧約聖書に語られる天地創造の1週間に対応するようだが、歩きながらその点を意識することはない。むしろ神秘的な数の儀式のイメージが、フィクションとして潜行しているような感じだろう。実際、私たちが体験するのはまさに森の小径であり、真っ白な幾何学的造形物を通して感じとれる自然の色や形や音や味、匂いや肌ざわりである。

歩く間に経過する時間が快い。コンクリートの造形物はときおり都市を思いおこさせるが、それとともに、このように森を体感できる一角が大都市のなかにあるという事実への驚き、喜びが芽ばえてくるだろう。

そのほか、森のあちこちに配置された彫刻は70点以上もあって、たとえば20世紀前半に活動したノルウェーの巨匠グスタフ・ヴィーゲランの5点などはめずらしいものだが、他の多くは現代日本の代表的なアーティストの作品である。

私にとっては面識のあった作家も多く、また北海道出身の本郷新、安田侃のような彫刻家の造形と森で出会う好機なのだが、毎回きまって見に行くものに、旭川生まれの彫刻家・砂澤ビッキの大作「四つの風」(1986年)がある。

四本のエゾマツの巨木を彫り削り、高さ5メートル

強の雄勁なポール(柱)として並立させたこの作品は、カナダでトーテムポールの研究もしたアイヌの彫刻家の晩年の代表作であり、またある意味で、森の民の島だった北海道を象徴する現代彫刻の代表作である。

林間の空地に立てたこの四本の柱について、作者は「風雪という名の^{のみ}鑿にまかせる」ように遺言した。野外の木材は鳥や虫や微生物によって蝕まれる運命にあるので、のちに一本、また一本と倒れ、いまでは一本しか立っていない。

倒れた柱は地上で腐食してゆくわけだが、その過程もまた森の時間であり、自然の生成変化の必然であることを、私たちはほかならぬ札幌の森のなかで、まざまざと実感するのである。

子どもの宇宙としての庭

最後は別方向の東区へ向い、あの広大なモエレ沼公園を歩くことにする。三日月湖の内側にひらけた面積189ヘクタールにもおよぶ緑地だが、ここもまた芸術にかかわる場所、というよりも、それ自体が芸術であるような特別の空間である。

1904年にロサンジェルスで日本人の父とアイルランド系アメリカ人の母とのあいだに生まれ、父に捨てられた母とともに来日して東京で育ち、15歳で単身渡米してからパリへ留学、ニューヨークで評価を得て以来、五大大陸を股にかけて活躍しつづけた野口勇ことイサム・ノグチは、一般には彫刻家として知られている。だがその活動は国境ばかりでなく芸術の境界も越え、多種多様のジャンルにわたっていた。

晩年にはとくに造園を好んでいたが、その間に札幌へ招かれて町並と風土に感動し、設計に着手したのがこのモエレ沼公園である。

それまで廃棄物処理場だった土地を埋め立てたあとに、「全体がひとつの彫刻作品とみなされ、宇宙の庭になるような公園」が構想された。作者自身は1988年末に没するが、遺志はほぼ忠実に受けつがれて、2005年には完成にいたった。

航空写真で見ると、地表に描かれた壮大な抽象画の

ようで、ペルーのナスカで鳥瞰した地上絵の記憶を反映させている。立体プランにはメキシコで見たアステカのピラミッドの記憶が重なる。地球上にのこる先住民族の遺跡のイメージを集めた「宇宙の庭」ともいえるような場所である。

ただし今回はその壮大なプランの細部には立ち入らず、ひとりの旅行者として、主に植物を見ながら散策してみよう。

最近では昨年の6月に訪れた。晴天にめぐまれ、初夏のひんやりした風が心地よかった。東の入口から橋を渡り、まずポプラ並木を歩く。気がつくやうに、空中に真っ白な綿毛の雪が舞っていた。北海道ではめずらしい出来事ではないけれど、そうだ、これはこの季節だったのか、と思い、私は昂揚した。

ふと思いかぶのはフェデリコ・フェリーニの映画『アマルコルド』である。この大映画作家の生まれ故郷だったイタリア北東部リーミニの町を舞台に、少年期の思い出（アマルコルドとは方言で「私は思いだす」の意）をたどるとびきりの名作で、四季折々のおもしろく切ないエピソードを綴ってゆくのだが、春の到来はポプラの雪で表現されていた。空に舞う真っ白な綿毛を全身で迎えて、子どもたちは喜び、浮かれ騒ぎ、駆けまわる。私はそれを思いだした。

さらに直進して水路を渡り、プレイマウンテン（「遊び山」と訳したい）を見あげてからサクラの森の遊具エリアに向ったが、この人工の幾何学的大空間に、樹木の茂る場所もかなりあることに気づいた。ブナやナラなどのオーク類、各種のサクラをはじめ、ポプラもまた要所を占めていて、裏が銀色に光る緑の葉に風をうけ、ときおりさわさわと音をたてていた。

私はその真っ白な綿毛を一心に拾い集め、花も摘み、袋に入れて東京へ持ち帰った。

子どもみたいだと思われるかもしれない。それでいい。あらためて思うのは、この公園が人を子どもにする空間だということだ。ノグチの目標のひとつはそれだった。大人の内なる子ども、文化の内なる野生を蘇らせる庭園。全体を「遊び山」と呼んでもいいこの大空

間には、そんな構想がふくまれていたのである。

広い園内を行き来したあとで、「ガラスのピラミッド」に着いた。札幌初訪問のときに出迎えてくれたあの友人がなんと45年ぶりに同行していたので、そのレストランに入ろうと提案した。本格的なフランス料理だが、昼のコースならそう高くない。土地の新鮮な野菜をふんだんに用いた料理は旨い。窓からの眺めもよかった。調理用に香草などを育てているすてきな菜園が見える。食後にそこへ行き、懐かしい香や色にまた昂揚した。

店名が「夢みる子ども」を意味するフランス語だったことも忘れがたい。イサム・ノグチ自身をあらわす言葉だろう。幼年期から外国人差別にさらされていた彼にとって、よい思い出といえ、東京高輪の幼稚園にかよった1年間だけだったという。その敷地には大名屋敷のなごりの庭園があって、その空間構成が少年を魅了した。以来、子どもの自由に遊べる理想の庭園を「夢みる」ようになったのである。

じつは私自身、たまたまその幼稚園の出身だという事情があって、多少の感情移入がともなうにしても、モエレ沼公園のあちこちに、ノグチの幼年期の夢が再生しているのを感じる。それは同時に人類の幼年期に体験されていた、原始の自然へのノスタルジアでもあるだろう。晩年のノグチが札幌の郊外のこの土地を選んだ理由もよくわかる気がする。

それから大通公園に戻り、モエレ沼公園以前に設置されていたもうひとつの作品、「ブラック・スライド・マントラ」を再見した。宇宙的なマントラ（サンスクリット語で「文字」「真言」の意）にも見える黒大理石の円筒の上から、いつものとおり、札幌の子どもたちが楽しそうに滑りおりていた。

大通公園 イサム・ノグチ「ブラック・スライド・マントラ」
この滑り台の原型は1972年のヴェネツィア・ビエンナーレ会場に設置された白大理石の「スライド・マントラ」である。撮影：筆者

